

第1回大会主将 林敏之さん



感無量「命懸け、走りきってくれた」

1987年の第1回W杯で日本代表主将を務めた林敏之さん(59)は元神戸製鋼は決戦の地で歓喜の瞬間を見届けた。「命を懸けて最後まで走りきってくれた。歴史を変えてくれた」。苦節を知る初代キャプテンは目を潤ませた。

それでも桜のジャージへの使命感は一層強かった。第1回は米国、イングランドに連敗。「最後まで下手な試合したら日本に帰れへん」と、練習後のミーティングのたびに涙があふれた。最終戦の豪州には食い下がったが、勝利はつかめなかった。

林さんは神戸製鋼で日本選手権7連覇に貢献。W杯には87年と91年に出場したが、2大会で1勝止まりだった。当時は環境にも恵まれず、第1回大会に帯同した選手

以外のスタッフはわずか4人。現役の代表選手もほとんどいない。一方、93年にW杯出場をあと一歩で逃したサッカー日本代表の「ドーハの悲劇」が全国

の話題になった。林さんは「なんでも(W杯に)出ないのに」と苦々しく感じたこともあった。世界での屈辱を胸に刻み、独自の「走り勝つ」ラグビーに活路を見いだした日本。2015年の前回大会で3勝を挙げ、今大会は伝説を連破し、初のベスト8に躍進した。32年前に礎を築いた林さんは言った。「日本ラグビーの歴史はこの試合のためにあった。(A組)1位として胸を張って南アフリカに挑戦してほしい」。感無量の表情で、進化した日本ラグビーを見つめた。

スコットランド戦を観戦する第1回W杯の日本代表主将で、元神戸製鋼の林敏之さん(13日、横浜・日産スタジアム撮影・辰巳直之)

(山本哲志)

2019.10.14 神戸新聞より

積み重ね、熱い想い入れ。

令和の時代にも受け継がれているものと思いましたが、まさに多国籍、グローバルな社会だからこゝ通用する話のようですね。